

ニコロ・デ・コンティの旅とトスカネッリの地図 およびボッジョの『再認されたインディア』

根 占 献 一

(一) ラムージオに始まる航海・探検叢書

16 世紀 40 年代に日本とヨーロッパの邂逅が開始された頃、イタリアではトレヴィーゾ出身のジョヴァンニ・バッティスタ・ラムージオ Giovanni Battista Ramusio(1485-1557)が航海と羈旅の最も基本となる文献、『航海・旅行記集成』第 1 巻(*Delle navigationi et viaggi*, Venezia, 1550)を刊行しようとしていた。ラムージオの編纂書は同時代の偉業に限らず、過去の記録をも収録する壮大なものであった⁽¹⁾。ルネサンスにおける所謂地理上の発見、あるいは大航海時代のなかでこそ、これは実現されたのであるが、時代の動向が昔日の延長にあることも教えていた。

ジェノヴァ人クリストフオロ・コロンボ Cristoforo Colombo (1451-1506)の大航海は、バルトロメ・デ・ラス・カサス Bartolomé de Las Casas (1484-1566)の『インディアス(アメリカ)史』(*Historia de las Indias*)や『航海日誌』(*Il giornale di bordo*)が教示しているように、ヴェネツィア人マルコ・ポーロ Marco Polo (1254-1324)の『東方見聞録』(*Il Milione. Divisament dou monde*)に親縁があった。ポーロは来日こそしなかったものの、西欧人にとっての最初の日本情報は彼のその書に負っていた。そこでは「チパング」、日本が黄金の島として紹介され、この魅力が後々まで続行し、彼らの関心を惹きつける。そのような日本を目指してアメリカに至ったのがコロンボである。また、ローマに本部を設けたイエズス会の活動は、中世のローマ教皇やフランス国王の派遣した、かつてのフランチェスコ修道会やドメニコ修道会の東方布教を思い起こさせよう。ラムージオにはポーロの旅もザビエルの日本情報もともに含まれる。

それだけではない。ルネサンスの文字通りの意義、「再生」がこの分野でも発揮され、古代文献の批判的摂取が新たな発展を促すことになる。ラムージオ

は俗語による文献彙纂が広汎な読者層を掴むことは無論だが、ヴェローナ出身の著名な自然哲学者ジローラモ・フラカストロ Girolamo Fracastro (1478-1553)あての『集成』第一巻序で、プトレマイオスの古典『地理学』(*Geographia*)の改善をも目論んでいると言明している⁽²⁾。彼の仕事は同時代のジョルジョ・ヴァザーリ Giorgio Vasari (1511-74)のそれに準えることができよう。このアレツォ生まれの芸術家が列伝(*Le vite*)初版を刊行したのは1550年のことで、それもまた13世紀以来の美術の壮大な発展を集大成するものであった。ルネサンスにあっては、ラテン語と俗語双方の表現手段を分け隔てなく考慮しておくことが肝心であるが、ラムージオとヴァザーリの一大仕事は俗語ヒューマニズムの記念碑となった。

ラムージオ以来、旅と航海に関する古典叢書を有するイタリアは、現代では、今なお貴重なシリーズ物「イタリア人の航海者と探検家の旅路と発見」(*Viaggi e scoperte di navigatori ed esploratori italiani*)全18巻⁽³⁾を発刊している。このなかには、周知のコロンボやポロ以外に、日本では有名でないものの、知るに値する人物も含まれている。たとえば、ポルトガルのエンリケ親王(航海王子)やマガリャンイス(マジェラン)などは高名だろうが、親王のために航路に出た、ヴェネツィア出身のアルヴィーゼ・カ・ダ・モスト Alvise Ca' da Mosto (c.1426-83)や、統率者亡き後、世界周航を達成したヴィチェンツァ人、アントニオ・ピガフェッタ Antonio Pigafetta (1491[以前。1480との間]-c.1535[一説では1526頃])らは、その旅行記の故にも重要な探検家の部類に属するであろう。また冒険に出ずとも、コロンボの意義を認識し、『新世界』(*De orbe novo*)を著わしたピエトロ・マルティーレ・ダンギエーラ Pietro Martire d'Anghiera (1459-1526)も忘れてはならないだろう。アンギエーラの名はマッジョーレ湖に面したアンジェラ(Angera)に由来する。彼は新興国スペインの要人中の要人となった。彼の作品を俗語に訳したのは、ラムージオと同郷で親友のアンドレア・ナヴァジェロ Andrea Navagero (1483-1529)であった。

もちろん、網羅的にすべての旅行者・冒険家がこの現代刊行物に含まれたわけではない。フィレンツェ人アメリゴ・ヴェスプッチ Amerigo Vespucci (1454-1512)の名高い書簡は印行されていない。幸いなことに、カ・ダ・モストやピガフェッタは先のイタリアのシリーズ物が底本として使用され、「大航海時代叢書」(1964年以降)のなかで邦訳されている。なお、ヴェスプッチの書簡

もこの邦訳集成では、1951年のブエノス・アイレス版（ロベルト・レビリエール Roberto Levillier 編）に基づいて翻訳されている。

コロンボは日本を目指したが、辿り着いたところは実はインディア（アジア）ではなかった。そこは、ヴェスプッチのいう「未確認の大地（terrae incognitae）」「新世界」（novus mundus）であり、ヨーロッパ人には未知の大陸であった。このことは、ロレンツォ・ディ・ピエルフランチェスコ・デ・メディチあてヴェスプッチ書簡（1503年）で言明される。コロンボはスペイン王室の支援を受け、ヴェスプッチもまた最終的にはスペイン国籍を得、1508年には同王から「航海士長」（piloto major）に任命された。こうしてスペインは西回りで黄金の国日本に関心を持ち続けた。コロンボの考えはこの黄金を資金にイエルサレムをイスラム教徒から奪還することであった。黄金は乏しく、日本は遠かった。イベリア半島のもう一方の国ポルトガルは果たしてどうであったのか。

（二）ニコロ・デ・コンティの旅行記

日本およびアジアから見て、『東方見聞録』とともに意味深いと思われる旅行記がイタリアのシリーズ物には収録されている。それはキオッジャ出身のニコロ・デ・コンティ Niccolò de' Conti (c.1395-1469) の記録で、マリオ・ロンゲーナが100頁の序論を付け、本文には詳細な学問的注を施している⁽⁴⁾。この記録はわが国では詳細に紹介されず、研究者の然るべき注目を集めてきたようには思われない⁽⁵⁾。それには、インドからマレー半島、さらにはインドシナ半島、ヴェトナムにかけて、またジャワからモルッカ諸島を含む、（極）東の島々にかけての初情報が含まれていて、たいへん貴重である。これらの地域はやがてポルトガルの進出するところとなる。そして、そのポルトガルが日本の初めて出会う西欧の国となることを考えると、この国がどのようなアジア情報を持ちえたのか、またポルトガル王の支援を受けたフランシスコ・ザビエル Francisco Xavier (1506-52) がリスボンを立つ前に入手できた、その情報源にはどのようなものがあったのかを知りたくなる。

ロンゲーナは、1492年にコンティの最初のラテン語印刷本が出版され、題名として『再認されたインディア』（*India recognita*）を有していたと記している。これは稀覯書に属し、およそ60年後のラムージオはこの版を利用するこ

とができなかった。さらにロンゲーナは、1502年のポルトガル語訳版はそのラテン語版から翻訳がなされ、実にラムージオはこの俗語版から自分の編纂書に取り組んだ、と述べている⁽⁶⁾。注視すべきは、葡語訳版が、ジェノヴァ出のジローラモ・ディ・サント＝ステファノ Girolamo di Santo Stefano の旅行記とともに、マルコ・ポーロの本文に続く体裁になっていることである。マリカ・ミラネージはその版がラムージオに先行する一旅行記集成、と指摘している。そして『東方見聞録』の葡導入には国家的意義があるように思われる⁽⁷⁾。

サント＝ステファノの旅行記とはエジプト、ペルシャ、アラブ、インド、南アジア、そしてスマトラ等の旅に関し、帰国の途次、1499年にシリアのトリポリで認められた書簡を指す。イタリア語を解するイスラム教徒の裁判官（uncadi）の調停により、この島で彼は事なきを得ているが、1491年とともにジェノヴァを旅立った同郷の友人ジローラモ・アドルノ Girolamo Adorno を1496年12月27日にペグー（Pegu）で喪っていた。アドルノと違い、彼の氏素性は不分明であり、また生没年も不明だが、その名は同郷のコロンボ自身の書簡（1502年3月21日）に現われる⁽⁸⁾。全体としてこれらの旅記録は、アジアを目指したポルトガル人やイエズス会士の必要不可欠な書となったであろう。

さて、一般に活版印刷術の登場により、これからの類推に基づくルネサンス知に頼りがちであるが、マニュスクリプトの意義と役割を無視することはできない。コンティの手稿本の場合も同様である。印刷本より早く写本で流布し、その種類も多い。また、『再認されたインディア』は元来、決して単行本ではなく、後述するようにポッジョ・ブラッチョリーニによる全4巻のなかの最終巻に過ぎなかった。だが、最後の第4巻のみが単独で出回った。その数も多い。全巻が揃って印刷出版されたのは、ようやく1723年になってからである。この間、優に200年以上経っている。全巻揃いのこの完全版（パリで発刊）は現在復刻版が出ている。これを見ると、ロンゲーナの指摘したこと、つまりラムージオの編集のことやポルトガル語訳などが第4巻序に既に述べられている⁽⁹⁾。

写本の一冊一冊に興味が湧く。豪華な手写本を愛好したウルビーノ公フェデリコ・ダ・モンテフェルトロ所蔵だったものもある。教皇ニコラウス5世に献呈されたもののように全巻の写本もあれば、コンティのみに関わる巻の写本もある。同時代の著名なヒューマニストたちの作品と一緒にのものも少なくないが、古代の作品や教父たちの著作と一本になったものも珍しくない。ただ、マルコ・

ポーロと一緒にあった写本はない。本に所収される各論の性質を同じくして、ドン・フランシスコ・アルヴァレス Don Francisco Alvarez の『エチオピア史』(*Historia d'Ethiopia*)、フィレンツェ人アンドレア・コルサーリ Andrea Corsali (1487-1524 以降。エチオピアで死去)の 1516 年、17 年の二書簡、およびフィレンツェ生まれで、現ニューヨークを発見するジョヴァンニ・ヴェッラツザーノ Giovanni da Verrazzano (c.1480-c.1427) のフランス国王あて書簡がひとつに纏められたものもある。しかもこの本は数ある写本のなかで成立が遅く、活版印刷の登場から一世紀近くも経った 1540 年にできた⁽¹⁰⁾。

インディアは再認識されたが、依然として神秘に満ちた地域であった。種々の結婚形態(一夫多妻制、多夫一妻制、一夫一婦制)、夫の死去に伴う、妻たちの火災での添い死になどの習俗描写、食人種、生態系の相違に由来する物珍しい植物の紹介、闘鶏の賭け、象の調教と利用、牛の神聖視、サイやヘビ、ワニ、ジュゴンなどの各種の生き物、極彩色の鳥類、不死鳥、また触手をそそる数々の宝石や貴金属、信じがたいダイヤモンドの埋蔵量と発見法、香辛料、芳香を放つ植物(樟脳)の案内は、アラビア半島以東のアジアの陸地と島々を眼前に髣髴とさせるうえで、絶大な力があつたであろう。大河に沿った都市の名が挙がり、またある都市と別の都市間の旅行日数が述べられる。

明の時代にも関わらず、「カタイと呼ばれる(*nomine Catauim*)中国(*Cina*)の統治者には大カーンの表現が用いられる⁽¹¹⁾。時に、イタリアにある都市に似た、中国の大きな都と比較され⁽¹²⁾、この国での紙幣使用は知っている。また時に、インドでのヴェネツィアのドゥカート貨幣使用に言及される⁽¹³⁾。アジアにおける黒髪重視と⁽¹⁴⁾、何に書くかに言及しながら、上から下へと真っ直ぐに字を書き連ねる習慣⁽¹⁵⁾を伝えている。その反応は、のちの時代に日本に関心を示した宣教師たちを想起させよう⁽¹⁶⁾。

これらの地域を歩むことは、諸宗教とその習俗との出会いでもあつた。キリスト教徒として、インドでの聖トマスの布教の跡やプレスタージョンの所在は気に懸かる。海港都市マリアブル(*Maliapur*、マドラス郊外)には聖トマスの遺体を安置した豪壮なバジリカがあり、ネストリウス派と呼ばれる異端の徒に崇められていると語る。この派の信徒たちは我々の世界ではユダヤ人がそうであるように、インド全体に広がっていると付け加える⁽¹⁷⁾。

偶像崇拝者には至る所で出会い、インドでは当然、ヒンドゥー教とそのカー

スト制には注目している⁽¹⁸⁾。哲学者のようなブラマン階級は占い（星占いと土占い）と関連づけられる⁽¹⁹⁾。

こうしてインド内部やアジア遠隔地の知識も格段に増え、地図製作に反映された。一ラテン語手稿本（Biblioteca Marciana di Venezia 蔵）をファクシミリで発行したグロッサートは、時のポルトガル王がコンティをインド諸都市に関する貴重な情報の源と見て、ラテン語からポルトガル語への翻訳を委託したと述べている⁽²⁰⁾。王はマヌエル 1 世、翻訳者はヴァレンティン・フェルナンデスを指すであろう。ポルトガルの関心はインド、そして「カタイ」にあったから、大きな刺激になったことは間違いない。翻訳にはこの言葉以外に、スペイン語、オランダ語、英語、そして二種類のイタリア語のものが存在する⁽²¹⁾。

（三）コンティとトスカネッリ

さらにコンティの証言記録には注目される点がある。地理・地図学者として研究業績を残したセバスティアーン・クリノによれば、このコンティはインドと中国を訪れただけでなく、日本に足を踏み入れた最初の西欧人であり⁽²²⁾、そこに妻と子供たちとともに、9 ヶ月間も住んだのである⁽²³⁾。クリノはさらに著名な一書『アメリカは如何に発見されしか』でも同意見を繰り返している⁽²⁴⁾。彼の主張するように、15 世紀前半の日本側の記録にヨーロッパからの「南蛮人」が訪れたという記録はない。またこの説がその後どのような評価を与えられたのかは寡聞にして知らないが、少なくとも広まった形跡はない⁽²⁵⁾。だが、コンティがかなり重要な歴史的人物であることに変わりはなく、小論に取り上げることに、また彼の主張は日本に関わるだけに検討に値しよう。

クリノ研究の狙いは、フィレンツェ人パオロ・ダル・ポッツォ・トスカネッリ Paolo dal Pozzo Toscanelli (1397-1482) が製作した地図にあった。トスカネッリは、甦った古典のギリシャ文献プトレマイオス⁽²⁶⁾とストラボン⁽²⁷⁾、ラテン文献のプリニウス『博物誌』(*Historia naturalis*)⁽²⁸⁾、そしてもたらされた最新の外国情報、コンティのアジア情報などをもとに、前時代からの地理の知識に修正を加えた。その決定的な点は、大西洋からインディアに向かう西方の旅路、東アジアの中国、日本への到達は想像以上に短距離で行われるというものであった。この判断は 1474 年のトスカネッリ書簡で明言される。この書簡はやが

てコロンボに強い影響を及ぼすが、他に彼に感化を与えた書として、教会大分裂、大シスマ時代の枢機卿ピエル・ダイイ Pierre D'Ailly (1350-1420)の『世界像』(*Imago mundi*, 1410) も無視できないだろう。西方に向かってインディアに短時日で着くこと、インディアとアフリカが近いことなどが指摘されていたからである⁽²⁹⁾。

また他に、ピウス2世の『歴史』(*Historia*)もコロンボの愛読書であった⁽³⁰⁾。1461年に執筆された箇所、教皇ピウスのアジアに関する記述にはコンティの影響が及んでいる⁽³¹⁾。この教皇の時代に、アジアに並々ならぬ関心を抱くポルトガルとフィレンツェの自然哲学者が親しく膝を交える機会が生ずる。教皇は1459年、マントヴァ公会議でキリスト教国に対し、反トルコ十字軍を呼びかけた。このため来伊したポルトガル使節はフィレンツェでは高名なトスカネッリと会談し、東方に関する地理情報を収集できた⁽³²⁾。

先の1474年書簡とは、この年の6月25日、ポルトガルはリスボンの聖堂参事会員フェルナン・マルティンス Fernam Martins あてのトスカネッリ書簡を指す。この写しが後にコロンボにも与えられて「新大陸」発見に繋がったとされる、いわくつきの書信である。ただ、手紙とともにトスカネッリから彼らに送られた地図は発見されていない。それがどのような地図であったかは、多くの研究者により縷々検討されてきた。『アメリカは如何に発見されしか』でクリノは、H・ヴァーグナー (Wagner) によって再構成された地図を収録するとともに、従来、1417年ジェノヴァ製地図と見られていた世界 (絵) 図を1457年フィレンツェ製作、しかもトスカネッリ作として色刷りで収めている。その研究書のなかでは周到な論点が展開される。プトレマイオス地図中の閉じられたインド洋を改訂し (この地図も収録) 「日本」が書き込まれたのはコンティの伝えた情報による、と主張している。さらに、1457年の地図製作のとき、トスカネッリは『東方見聞録』を知らなかったが、書簡を書く前までにはこれを読む機会があり、1474年のマルティンスあて地図ではこれが活かされ、書面からもそれが読み取れるとする⁽³³⁾。

今日、『東方見聞録』がドメニコ会修道士ピピーノ・ダ・ボローニャ Fra Pipino da Bologna によって14世紀初めにラテン語訳され、非常に広く写本が出回ったことが分かっている。これから俗語訳も行われた。その初版印刷は1485年アントワープにおいてであった。コロンボが丹念に読んだのも、このピピーノ

訳であり、1485年版はこの航海者が所有していたことも分かっている。写本研究の第一人者セバスティアーノ・ジェンティーレは、トスカネッリが書簡を綴った際、この最も「科学的な」ラテン語訳を用いた可能性があったとし、またトスカナ語訳は広く出回っていたので、こちらも接しえたとしている⁽³⁴⁾。

フラ・マウロ Fra Mauro の地図（完成は1460年）もまた、クリノによれば、コンティの情報から影響され、そこにはふたつの Java、つまり日本が明示されているという。この地図はポルトガル国王アルフォンソ5世のために、ヴェネツィア、ムラーノ島のサン・ミケーレ聖堂カマルドリ会修道士マウロが製作し、ヴェネツィア貴族ステファノ・トレヴィザン Stefano Trevisan が発送した、著名な世界地図である。クリノは日本を示すと見なす地図を載せるとともに、一島は今日の本土（Hondo）としている⁽³⁵⁾。

ニコラウス・クザーヌス Nicolaus Cusanus (1401-64) 研究者として知られているポーリン・モフィット・ワッツは、西欧における地理学上の進展を扱った、簡にして要を得た論文のなかで、ピウス2世らの親友クザーヌスから、荒野や僻地へ向かう修道的な旅人（viator）から探検家、冒険家としての探求者（venator）宇宙誌的人間（homo cosmographicus）へと変わったと述べ、その例証として『知恵の狩りについて』（*De venatione sapientiae*）『要約』（*Compendium*）のクザーヌス作品を挙げている。パドヴァ大学でのクザーヌスの同窓トスカネッリもまた、そのような人物と言えよう。彼女は、1464年クザーヌスの死床のそばに、トスカネッリと侍医マルティンスがいたと記し⁽³⁶⁾、三者の人間関係を示している。既述のように、コロンボはマルティンスと密接な関係があり、彼を介してトスカネッリと繋がり、ポイントとなる書簡と地図の写しを入手した。コロンボもまた冒険家、venator であっただろうが、彼にはしかし、神秘主義的使命感も強固にあった。ポーロらが伝えるアジアの地にキリストを運び込むことほど、自分の名クリストーフォロに相応しいことはなかった⁽³⁷⁾。

（四）コンティとポッジョの『運命転変論』

ところで、トスカネッリやクザーヌスの同時代人たる冒険家としての venator、コンティの旅行記録は、前述のように自身の書き著したものではな

い。その点で『東方見聞録（世界詳述）』（*Divisament dou monde*, 1299 年）の事情に似ているが、違う点は言語媒体であろう。見聞録が北イタリアで広範な散文文学語であったフランス語で記されているのに対し⁽³⁸⁾、コンティのほうは優れたヒューマニストのラテン語で記述されている。作者はトスカーナ、テッラヌオーヴァ生まれのポッジョ・ブラッチョリーニ Poggio Bracciolini(1380-1459)である。ラテン語能力を買われ、8 人の教皇に 50 年間奉仕した。時はシスマ時代であった。そしてこの間、数々の古典を西欧各地で発見した。シリウス・イタリクス Silius Italicus の『ポエニ戦役』（*Punica*）スタティウス Statius の『セルヴェ（Selve）』（*Silvae*）ルクレティウス Lucretius の『事物（自然）の本性』（*De rerum natura*）クインティリアヌス Quintilianus の『弁論術教程』（*Institutio oratoria*）などがそれらである。一時期ローマ教会での公職を離れて、英国にパトロンを求めた。古典籍が見出せず、憂鬱な日々を過ごしたが、再度、教会の仕事に戻った⁽³⁹⁾。

教皇エウゲニウス 4 世時代は対立と戦いの日々であった。1438 年 1 月、教皇庁がフェッラーラからフィレンツェに移って公会議が開催される。教皇庁秘書官のポッジョも当地にいた。このとき種々のキリスト教宗派が世界各地から集まり、39 年、各派を超えて、ローマ教会下での合同になった。47 年、エウゲニウス 4 世が死去し、新たな教皇に、古典に豊かな素養のあるニコラウス 5 世が選出された。知己の間柄であるこの教皇は天から送られてきたかのように思われた。先の時代と違い、平和が待望される。ヒューマニズムへの期待を込めながら、この教皇にあてた、ポッジョの「美しい」挨拶（1447 年 5 月 1 日）が届けられる⁽⁴⁰⁾。後述する『運命転変論』の献呈先は、各種写本の箇所に触れたこのニコラウスであった⁽⁴¹⁾。

また同時期に属する、エンリケ親王あてポッジョ書簡（1448/49 年）は、西欧が海外に雄飛しようとする時代の雰囲気をよく伝えている。父王ジョアン 1 世の方針を受け継いだこの親王のもとで、強力で推進されている東アフリカ南下政策に歴史的意義を与えながら、未信仰者の地にキリスト教信仰を拡大することを願っている⁽⁴²⁾。最晩年はカルロ・マルスッピーニ Carlo Marsuppini(1398-1453)の跡を襲って、フィレンツェ共和国の書記官長となった。この国の激しい政治的対立に遭遇することになるが、老ポッジョにはもはや公的仕事に打ち込む情熱はなかった。

さて、ポッジョとコンティの出会いがフィレンツェで実現したのは、公会議開催地であったことによる。この公会議は^エ全^ク教^メ会^ニ統^コ一を志向し、ルネサンスは^エ居^ク住^メ地^ニ域を拡大していた。コンティはアラビアからペルシアを旅するなかで、止むを得ずキリスト教を打ち捨ててイスラム教に改宗していた。1439 年、教皇に会うべくフィレンツェに来、赦免を請うた。この機会を捉えて、ポッジョは自宅で彼から話を聞き、ラテン語に綴ったのである。

好色な『滑稽譚』(*Facetiae*) しかもこれもラテン語作品！ のポッジョらしく、イラワジ川の都市 Ava にまつわる性的話⁽⁴³⁾などは、特にこのヒューマニストの興味を惹いたように思われる。コンティは後の時代のヴェスプッチ書簡同様に、性的欲情あふれる現地の女性に言及する。ここでは *erotica* と *exotica* が併存している。ポッジョの女性関係は夙に有名で、彼の評価に悪影響を与えている面がある。正式に結婚したのは 1436 年 56 歳の時で相手は 18 歳であった。この体験をもとに小品『老人は妻を娶るべきか否か』(*An seni sit uxor ducenda*) が執筆された。対話に登場するのは親友のふたり、ニッコロ・ニッコリ Niccolò Niccoli(c.1364-1437)とマルスッピーニである。コンティの記録に随分とインディアの結婚形態が出てくるのは、作者自身の興味の為せる業か。オリエントで一夫多妻は珍しくないが、ひとりの妻で満足とか、あるいは一妻多夫 (*poliandria*) の形式も紹介される。ネストリウス派のキリスト教徒が大方を占め、アロエを産するソコトラ (*Socotra*) 島の向かいに、男だけの島と女だけの島があり、半年間、互いに相手の島に出掛けるという⁽⁴⁴⁾。これとほぼ類似した話は既に『東方見聞録』にある。

1414 年から四半世紀に及ぶ、そのようなコンティの冒険旅行譚が収録されたのは、ポッジョの数多い著作の一冊『運命転変論』(*De varietate fortunae*) においてであった⁽⁴⁵⁾。そして、『運命転変論』の第 4 巻が旅の記録となっているのは、既述した通りである。先の 3 巻は、中世からルネサンスにかけて人々の心を惹きつけて離さなかったフォルトゥーナが主題であり、人間世界の有為転変が描かれる。キリスト教の神の摂理が支配しているにも拘わらず、この異教の女神が自由気ままに振る舞える余地が残されている。第 1 巻は同じ教皇秘書官でヴィチェンツァ出身アントニオ・ロスチ Antonio Loschi(c.1365-1441)が対話の相手である。ローマの廃墟が話題となり、世の移ろいを示している。1402 年の現代の出来事、タメルランによるトルコ征服も取り上げられる。第 2 巻は

1377年から1431年の教皇マルティヌスの死までの出来事が扱われ、運命の変遷が示される。第3巻は対話の相手にマルスッピーニが登場し、エウゲニウス4世（1431-47）による教会統一、アルメニア、コプト、エチオピアなどの東方教会が取り上げられる。

第4巻はこの叙述の発展として多様な世界、民族に言及されることになる。従来の対話形式は捨てられる。冒頭でポッジョはこの巻の愉快的逸脱について弁解を述べ、キケロのレトリック書の根本精神で、楽しませ（delectare）教え（docere）そして感動させ（movere）ようと努める⁽⁴⁶⁾。コンティの体験が中心となるこの巻には従来の三巻にはない異質性が濃厚で、異教世界の種々の見聞が披瀝され、倦むところがない。イタリア、ヨーロッパの世界との比較の視点が常にあるものの、優越感的意識は殆ど感じられず、ある意味で爽快である。他宗教を攻撃している様子もなく、たんたんと報告している。これは当然、我らのヒューマニストの姿勢の反映でもあろう。故郷を離れて25年間⁽⁴⁷⁾、アラビア、ペルシャ、インド、ビルマなどのオリエント、アジアを旅したコンティは、数奇な運命に、フォルトゥーナに弄ばれたといえるだろう。ヴェネツィアに息子二人と帰還したが、故郷を目前にしたカイロで、ペストのため妻と二人の息子、召使全員を喪っていた。

（五）コンティの旅と「日本」記述

ここで改めて第4巻の構成を見、その後、日本との関係如何を検討してみよう。それは大きく二部に分けられ、前半は広くインドを中心としたアジアの住民と習俗に頁が費やされている。これがコンティとの談話に基づく部分であり、その内容については既述した通りである。そのなかで、イタリア帰還に続く箇所、コンティはインドが3地域に分けられると指摘する。ペルシャからインダス川まで、次にここからガンジス川まで、そしてさらにここから先の地域とにである。この地域は人間らしさ（humanitas）が豊かで、我々と似ているという⁽⁴⁸⁾。

そして後半は前半に比べて圧倒的に分量が少ないが、別人からの情報としてアフリカの住民と棲息動物、自然環境、特にエチオピア人とナイル川の源などが話題になっている。この水源はプトレマイオスが詳細に述べていて、古典に

典拠があった⁽⁴⁹⁾。アジア（インディア）と同様に、アフリカの地ではペスト（*pestilentia*）が存在せず⁽⁵⁰⁾、このために特にエチオピアの人は長命と強調される。この点だけなら、現地はユートピアの世界のように映じている。またその地は自国の習慣に似て、テーブル、テーブルクロス、ナプキンを使用すると述べられる⁽⁵¹⁾。

以上のなかに、「日本」を表現したものは見出せない。ガンジスから先の地域にあるはずの日本は言明されてはいない。クリノと違い、ロンゲーナもゲレラフェルテもコンティの日本行きをまったく問題にしていない。のみならず中国行きにも否定的である⁽⁵²⁾。ポッジョはマルコ・ポーロの『東方見聞録』を知らなかったようである。プリニウスとの関連でしかコンティの旅を考えていず、ポーロやオドリコ・ダ・ポルデノーネのアジア情報は無視できないはずなのに、これらが読み取れない⁽⁵³⁾。古典に詳しいヒューマニストが中世の文献を知らないことになる。彼らを熟知したうえで、ポッジョがコンティに質問していれば、中国に関して、そして一層日本に関して、もっと多くの情報を聞き出せたかも知れない。そうなれば、コンティのインディア情報と先人たちの極東情報を比較できたであろう。

しかし、クリノによれば、ポッジョは *India interior* を北部シナとし、トスカネッリはガンジス川から先のインディア（*India ultra Gangem*）においてカタイとシナ（*Cataio e Sine*）を区別している。先述した地図上に、北部シナの向かい側、東に、ふたつの Java があるが、この Java はボルネオあるいはスマトラのことではなく、日本 *Japan* を指しているとする⁽⁵⁴⁾。これ（ボルネオあるいはスマトラ）にはコンティは *Taprobane* の名称を与えているから、間違はずがないとする⁽⁵⁵⁾。既出の Ava から 17 日で *Panconia*⁽⁵⁶⁾ に入った。そしてここから 1 ヶ月の航海で日本に行き、長期間滞在したのである。コンティはジャワには行かず、マルコ・ポーロと同じだったともいう⁽⁵⁷⁾。

場所を同定することは必ずしも容易なことではない。クリノは *Cambalech* を南京とするが、他の研究者たちは北京であり⁽⁵⁸⁾、余りにも差が大きい。また、クリノが日本と見なす Java 叙述は、当時の日本に関する記述（鼠までも食し、また住民の残忍性など）⁽⁵⁹⁾ とはとても思えない。9 ヶ月の割には具体性に乏しく、都市の名ひとつ挙がっていない。不思議な話である。同じことは中国にも言えるが、日本よりはるかに具体的であり、ラムージオがコンティの中国訪

問を信じていたのも肯ける。それはイタリアの関心が日本よりも一層強くこの国に向かっていた事情にも負っている。1373年にフィレンツェ市民権を得た家庭に1438年に生まれたジョヴァンニ・ダ・エンポリ Giovanni da Empoli は、コーチン発の書簡（1515年）で、コンティ同様にこの国を豊穡な文明国として扱う。また、「我々同様」という表現を連発するなかで、肌の色が白いと記す⁽⁶⁰⁾。中国本土に入ることを希望したが、1517年10月広東港でコレラのため34歳で死去した。彼の書簡内容や広東での出来事は、我々に容易に、日本との関係が深いアレッサンドロ・ヴァリニャーノ Alessandro Valignano(1539-1606)の見解やザビエルの中国入国の夢を想起させずにはおかない⁽⁶¹⁾。

コンティが日本に来ていれば、ポルトガル人の初来日1542年ないし43年説より一世紀以上遡ることになるが、ポッジョを読む限り、これはかなり無理だと結論してよからう⁽⁶²⁾。

コンティの訪れた頃の南アジアの海は基本的にはイスラムの海（mare islamicum）であり、自由な海（mare liberum）として機能した。祖国に帰ったとき、海上にポルトガルの船影を見出すのは困難であった。この状況が60年後には一変する。コンティが曖昧に語っていたモルッカ諸島には、ヨーロッパ人として初めて、ボローニャ出身のロドヴィーコ・ダ・ヴァルテマ Lodovico da Varthema(1470以前-1517)が来島する。1500年にオリエントに出る時はコンティの旅とそう変わらず、エジプト、シリアを通る。メッカとメディナは巡礼者に扮装しての旅であった。1508年、喜望峯を経て帰りつく時はポルトガル船に乗っていた。3度出航したジョヴァンニ・ダ・エンポリや、外交の任務を帯びたアンドレア・コルサーリも、ポルトガルの航路なしには往来することは不可能であったろう。コルサーリはメディチ家にあてて有名な書簡を認め、そのなかでインド美術に高い評価を与えた⁽⁶³⁾。ルネサンス文化の只中にいた教養人がまったく異なる文化に驚き、これを評価しているのである。

これらの人々の活動はニッコロ・デ・コンティ死後、30年から50年、のちのことである。たとえまだまだ日本は遠かったにせよ、ポッジョ以後の人たちは彼の残した作品のお陰で、豊かなアジア情報を持つことができるようになっていた。やがてヴァルテマらの情報がこれと相俟って、ポルトガルの強い関心と呼び覚ますことになった。そのようななかで、コンティが我々の文化圏に、あるいはその近くまで来ていることを感じ取ることも不可能ではない。ロンゲ

ーナがコンティの報告に基づく註釈で、日本酒や温浴、蒸し風呂に言及しているのは、そのことを強く感じさせる。日本人の風呂好き、清潔好きは、やがて来る宣教師たちに驚きとなるであろう⁽⁶⁴⁾。ポッジョの作品は、イタリア・ルネサンスがヨーロッパだけの領域に留まるものではないことを示している。同ルネサンスは単なる古典の復興時代ではない。ギリシア・ローマの古典と現在の体験がひとつになって新世界が開かれ、東西の結びつきがより深化・強化されていく時代でもある。ルネサンスは過去と未来に顔を向けているのである。

この小論を結ぶにあたって漸く気付いたことがある。商業史の専門家なら既に多用しているはずの術語を私は使っていなかった。ここまで、コンティが「レヴァント貿易」に従事する「商人」であるとは一言も発しなかった。この括弧内の用語は一切用いていない。しかし考えてみれば、彼の長旅は優先的に地理学的探求のために行なわれた活動では微塵もなかった。紛れもなく、彼は商業立国ヴェネツィア共和国の一商人であり、商務先のオリエント各地の種々なる産物を見落とすことは決してなかった⁽⁶⁵⁾。日本のことではないが、黄金の島の話も出て来る⁽⁶⁶⁾。黄金の国チパングの情報も当然のことながら、持ち合わせていたかも知れない。「9ヶ月」留まったその国は倭寇を輩出していたから、ひょっとしたら東アジアで恐れられていたのかも知れない。そのため、残忍性が強調されたのかも分からない。ポッジョの『運命転変論』第4巻、つまり主としてコンティの旅記録となっているこの巻は長大なものではないが、まだまだ検討されるべき余地が残されていると言えよう。

注

- (1) G.B. Ramusio, *Delle navigationi et viaggi*, 3 voll., Venezia, vol. I 1550, vol. II 1559, vol. III 1556. 各巻はその後幾度となく再刊され続けた。現代では1970-71年アムステルダムでG.B. ParksとR.A. Skeltonの手により、1563、1583、1606年版が復刊された。装いも新たな版は次注参照。
- (2) Id., *Navigazioni et viaggi*, a cura di Marica Milanese, 6 voll., Torino 1978-1988.
- (3) Milano, Alpes 1928-32. これらも再刊されているようだが、全巻か否かは不明。
- (4) *Viaggi in Persia, India e Giava di Niccolò de' Conti*, Girolamo Adorno e Girolamo da Santo Stefano, a cura di Mario Longhena, Milano 1929. 以下、Longhenaとして引用。ロンゲーナ版にはラテン語原文は含まれていないが、イタリア語訳は15世紀のDomenico da Brisighella訳を利用している。Ibid., 67, 117.

- (5) 岸野久『ザビエルと日本 キリシタン開教期の研究』吉川弘文館、平成 10 年、61 頁。
寸言とは言え、例外と証すべき指摘が見られる。しかし、アレッサンドロ・ヴァリニャーノ『東インド巡察記』高橋裕史訳、東洋文庫、平凡社、平成 17 年、3-7 頁（訳者はしがき）特に 6 頁で、マルコ・ポーロ以後ヴァリニャーノまで東アジア世界の情報が皆無であるかのように記されているのは、誤解を招こう。
- (6) Longhena, 70, 72, 77. 前注(2)のミラネージ版では第 2 巻を参照。
- (7) 岸野『西欧人の日本発見』吉川弘文館、平成 7 年第 2 刷、第一章でマルコ・ポーロは詳細に検討されている。但し同書 4 頁で、コンティの旅行記をフィレンツェ生まれのボッジョ・ブラッチョリーニがラテン語訳して、1492 年に出版したというのは正しくない。*Navigazioni et viaggi*, I, XI-XXXVI (Introduzione), 特に XXII. 次の両書ではポーロ導入に関する同一の事実が指摘されている。井沢実「大航海時代の先駆者ポルトガル」、『西アフリカの記録』大航海時代叢書 II、岩波書店、1972(1967)年に所収、84-6 頁。岸野、前掲書、5-6 頁。
- (8) P. Amat di S. Filippo, *Studi biografici e bibliografici sulla storia della geografia in Italia*. Volume I, *Biografia dei viaggiatori italiani colla bibliografia delle loro opere*, seconda edizione, Roma, 1882, 206-209. Longhena, 215-40. ロンゲーナはボローニャ大学図書館保管の原文を 1905 年に発表したか、ここに再録されている。したがって岸野、前掲書、5 頁の「この原文（イタリア語）は現在失われている」というのは理解に苦しむ。ラムージオはポルトガル語からイタリア語に訳し、ミラネージ版ではこれは第 2 巻に収録されているが、かなり短い。
- (9) Poggio Bracciolini, *Historiae de varietate fortunae*, Ristampa anastatica di 1723, Bologna, 1969, 123-5, 特に 124. Longhena, 71 によると、1723 年版は 1492 年版と殆ど変わらない。なお目下、最新の Merisalo 批判版を参照できていない。Poggio Bracciolini, *De varietate fortunae*, Edizione critica con introduzione e commento a cura di O. Merisalo, *Annales Academiae Scientiarum Fennicae*(ser.B, t.265), Helsinki, 1993.
- (10) Longhena, 57-66, 特に 59. Poggio Bracciolini, *De l'Inde. Les voyages en Asie de Niccolò de' Conti, De varietate fortunae livre IV*, Texte établi, traduit et commenté par M. Guéret-Laferté, Turnhout 2004, 60, 62. このフランス語対訳版は序論も注も充実。以下、Guéret-Laferté として引用。マニユスクリプトとして Longhena, 57 は 31、Guéret-Laferté, 60 は 33 を数えている。Guéret-Laferté, *ibid.*によると、Merisalo は 59 という。次の書はマニユスクリプトのひとつを収録している。A. Grossato, *L'India di Niccolò de' Conti. Un manoscritto del libro IV del De varietate fortunae di Francesco Poggio Bracciolini da Terranova (Marc.2560)*, Padova, 1994. これには、イタリア語訳の新訳（17-44. この間には挿絵がある。注は 45-48）手稿のファクシミリ（51-77）ラテン語原文転写（81-94）が含まれている。マニユスクリプト数は、*Ibid.*, 15 も 31 で、イタリアに 24、国外のフランス、ドイツ、英国に 7、と。グロッサートはヴェネツィアのマルチャーナ図書館にある 3 本のうち 1 本を収めた。その番号は表題にある通りである。
- (11) Longhena, 145-47. Guéret-Laferté, 108-12.

- (12) Longhena, 145-46. Guéret-Laferté, 110-11. Grossato, *op.cit.*, 26. 中国の都市 Cambalestia (Cambaleschia), Nemptai に関して言われている。前者は北京、後者は南京もしくは杭州 Quinsai と目される。
- (13) Longhena, 178. Guéret-Laferté, 158-59. Bizenegalia つまり Vijayanagara ヴィジャヤナガル (ヒンズー教の地) からヴェネツィア貨幣が発掘されている。Longhena, 127n. Grossato, *Navigatori e viaggiatori veneti sulla rotta per l'India da Marco Polo ad Angelo Legrenzi*, Firenze 1994, 50, 57. コンティが西欧人として初めて記述、訪問というのは多いが、ヴィジャヤナガルもそのひとつ。Guéret-Laferté, 39-40, 87n.
- (14) Longhena, 164-65. Guéret-Laferté, 138-39.
- (15) Longhena, 179. Guéret-Laferté, 158-59.
- (16) 髪の色については、拙著『東西ルネサンスの邂逅』東信堂、1998 年、163-64 頁。垂直に文字を書くことに関しては、日本人最初のキリスト教徒アンジロウ (弥次郎) の当意即妙な言が思い起こされればよい。
- (17) Longhena, 129-30. Guéret-Laferté, 90-1. 日本にもネストリウス派が伝来した可能性は、Grossato, *L'India di Niccolò de' Conti*, 47n. 116.
- (18) カーストを始め、コンティの観察、ポッジョの叙述の態度に関しては、Guéret-Laferté, 41.
- (19) Grossato, *Navigatori e viaggiatori veneti*, 55.
- (20) Grossato, *L'India di Niccolò de' Conti*, 11. 注(10)参照。
- (21) *Ibid.*, 15. 注(4)参照。
- (22) Sebastiano Crinò, *La scoperta della carta originale di Paolo dal Pozzo Toscanelli che servì di guida a Cristoforo Colombo per il viaggio verso il Nuovo Mondo*, Firenze, 1941, 19, 101, 106 (次のウェブサイトは疑いなく彼の説に従う。<http://www.provincia.ps.it/privati/bberti/behaim/NiccolodeiConti.htm>)
- (23) Longhena, 147. Guéret-Laferté, 114-15.
- (24) *Come fu scoperta l'America. A proposito della identificazione della carta originale di Paolo dal Pozzo Toscanelli la cui copia servì di guida a Cristoforo Colombo per il viaggio verso il Nuovo Mondo*, Milano, 1943, 110-15.
- (25) *Firenze e la scoperta dell'America. Umanesimo e geografia nel '400 fiorentino. Catalogo* a cura di Sebastiano Gentile, Firenze 1992 でのクリノ説はともかくとして、ジェンティーレはクリノ評価に否定的でない。ただ、日本人のように来日か否かに関心が薄いこともありうるから、この問題を重視していない可能性がある。
- (26) *Geographia* が齎されたのは14世紀末、マニユエル・クリュソロラスによってであった。翻訳は Jacopo Angeli da Scarperia によってなされ、アレクサンデル5世に献呈された。
- (27) この書に関しては *Firenze e la scoperta dell'America*, 165-66. ゲミストス・プレトンは Ciriaco d'Ancona によりフェッラーラとフィレンツェの公会議に誘われて来伊した。その結果、彼の貴重なストラボン訂正が史料として残されることになる、と。これから、トスカネッリとの関係も知られる。翻訳者は Gregorio Tifernate と Guarino Veronese で

ある。

- (28) ニッコロ・ニコリとの関係、また彼の遺言書とトスカネッリらの名などに関しては、Guéret-Laferté, 20-2. ボッジョとニコリは親友同士で、数多の交友が残っている。
- (29) *Firenze e la scoperta dell'America*, 115-16. コロンボが精読した書籍のなかには、聖アントニーノ Antonino の *Summula confessionis* もある。15 世紀フィレンツェで敬愛を受けた聖アントニーノの名はキリシタン版にも登場する。
- (30) Crinò, *Come fu scoperta l'America*, 20-3.
- (31) *Ibid.*, 21, 53. ボッジョとの比較は、Guéret-Laferté, 58n 144.
- (32) Crinò, *op.cit.*, 59, 73.
- (33) *Ibid.*, 140, 141, 145.
- (34) *Firenze e la scoperta dell'America*, 42-44. ジェンティーレはここで、オドリコ・ダ・ポルデノーネ Odorico da Pordenone の『報告』(*Relatio*)とピビーノのラテン語訳版と一緒にあった手稿本を紹介している。
- (35) Crinò, *op.cit.*, 111-12, 120, 122-24.
- (36) Pauline Moffitt Watts, *From the Desert to the New World: the Viator, the Venator, and the Age of Discoveries*, in *Renaissance Studies in Honor of Craig Hugh Smyth*, edited by A. Morrogh et al., Firenze, 1985, I, 519-30, 特に 526-27.
- (37) R. Manselli, *Cristoforo Colombo, Alessandro VI e i primi missionari francescani*, in *id.*, *Da Gioacchino da Fiore a Cristoforo Colombo. Studi sul francescanesimo spirituale, sull'ecclesiologia e sull'escatologismo bassomedievali*, introduzione e cura di P. Vian, Roma, 1997, 668-80, 特に 672.
- (38) Ronald G. Witt, *In the Footsteps of the Ancients. The Origins of Humanism from Lovato to Bruni*, Leiden/Boston/Köln, 2000, 51-2. なお最新の『東方見聞録(世界詳述)』(*Le devisement du monde*) 批判版諸巻が Librairie Droz より出版中である。
- (39) ボッジョに関しては特に次の書を参照した。E. Walser, *Poggius Florentinus. Leben und Werke*, Hildesheim/New York, 1974(1914).
- (40) Longhena, 49. Walser, *op.cit.*, 219-21. Giuseppe L. Coluccia, *Niccolò V umanista: papa e riformatore. Renovatio politica e morale*, Venezia 1998, 276.
- (41) Poggio Bracciolini, *Historiae de varietate fortunae*, 1-4 に収録。 *Ibid.*, 1 の注として、Nicolao V. Summo Pontifici, literarum restitutori, cui Poggius a secretis fuit, hanc de *de varietate fortunae* historiam dicavit, ut et Diodori Siculi, et Xenophontis latinam interpretationem.
- (42) Poggio Bracciolini, *Lettere III Epistolarum familiarum libri secundum volumen*, a cura di H. Harth, Firenze, 1987, 88-90. Guéret-Laferté, 182-87.
- (43) Longhena, 140. Guéret-Laferté, 102-03. Grossato, *L'India di Niccolò de' Conti*, 22, 46n. 67 によれば、住民によって Dava (イラワジ川) と呼ばれる大河ガンジス川を一ヶ月遡行すれば、Ava と呼ばれる高貴な都市に至るのだが、この町は国の都(1364-1783)だった。1839 年、地震で壊滅、と。ジローラモ・サント＝ステーファノでは性的逸事は

- Peygo (Pegù ペグー) でのことである。Longhena, 231.
- (44) Longhena, 158-59. Guéret-Laferté, 130-31.
- (45) 時間とともに2巻から4巻と巻数が増えていったことに関しては, Walser, *op.cit.*, 235n.
- (46) Guéret-Laferté, 76n.
- (47) 旅の途次、コンティに会ったカスティリヤ人 Pero Tafur は「40 年間」という。La relazione di Pero Tafur, in Longhena, Appendice A, 199-213, 特に 201.
- (48) Longhena, 160. Guéret-Laferté, 134-45. Grossato, *L'India di Niccolò de' Conti*, 34.
- (49) Longhena, 186n.
- (50) Longhena, 180, 192. Guéret-Laferté, 160-61. 172-73.
- (51) Longhena, 193. Guéret-Laferté, 174-75.
- (52) Longhena, 23 にインディアの ultima にあるいは intima まで旅する、と。 *Ibid.*, 145n. Guéret-Laferté, 45n. コンティは中国に行かなかったが、ピウス2世やラムージオは行ったと考えた。ラムージオの場合、明らかに『東方見聞録』に影響されていた。 *Ibid.*, 58, 112n. Walser, *op.cit.*, 242 では vielleicht を用いて、中国訪問の可能性に言及。
- (53) *Ibid.*, 35, 78n. Grossato, *Navigatori e viaggiatori veneti*, 49.
- (54) Crinò, *op.cit.*, 98-100. Cfr. Guéret-Laferté, 113n. クリノはコンティが知っていたアラビア語に p はなく、またポッジョのラテン語版(1723年)に <Java. Latine Jabadis insula, prope Sinarum Regnum> 「ジャワ。ラテン語で<ジャバディス>の島、シナ王国の近く」とある註釈を引用している。Crinò, *op.cit.*, 99, 113. Poggio Bracciolini, *Historiae de varietate fortunae*, 135(b). Cfr., Grossato, *L'India di Niccolò de' Conti*, 85.
- (55) Crinò, *op.cit.*, 99. Guéret-Laferté, 79n, 94n.
- (56) クリノでは北京を指す。Grossato, *Navigatori e viaggiatori veneti*, 53n. 97 ではバンコックかペグーである。ペグーはルビーの産地として名高い。M. Spallanzani, *Giovanni da Empoli. Un mercante fiorentino nell'Asia portoghese*, Firenze, 1999(1984), 99.
- (57) Crinò, *op.cit.*, 113.
- (58) Longhena, 145. Guéret-Laferté, 110-11.
- (59) Longhena, 146-49. Guéret-Laferté, 112-15.
- (60) 書簡は Spallanzani, *op.cit.*, 229-33 に所収、特に 231。
- (61) 拙著『東西ルネサンスの邂逅』21-2 頁。
- (62) このこととトスカネッリの地図に「日本」が書き込まれているか否かは、また別問題だろう。どちらかという地図学者であるクリノの説は今尚、問題を提起しているのではないだろうか。
- (63) Guéret-Laferté, 31-3. M. Spallanzani, *Mercanti fiorentini nell'Asia portoghese (1500-1525)*, Firenze, 1997, 28-32.
- (64) 酒については Longhena, 161n. 2. 蒸し風呂、温浴については Longhena, 175n. 2.
- (65) W. Heyd, *Histoire du commerce du Levant au Moyen Âge*, Amsterdam, 1959 (1885-86), 2 tomes. レヴァント貿易研究史上の金字塔であるこの書は、そのフランス語訳版が幾度か再刊されている。コンティの名も出る。なお、イタリア語訳版は見えない。

Id., *Storia del commercio col Levante nel Medio Evo*, Torino 1913.

- (66) アンダマンの島のことである。食人が住む、と。 Longhena, 132-33. Guéret-Laferté, 94-5.